

平成27年度

奈良県公立学校優秀教職員
表彰実践事例集

平成28年1月

奈良県教育委員会

目 次

【小学校】

学習指導の部

- 1 新入学児童のスムーズな学校生活の適応に関する指導
奈良市立平城西小学校 教諭 野津 和子 1
- 2 児童が能動的に学ぶための平和学習の実践
天理市立柳本小学校 教諭 藪内 善史 3
- 3 ICT機器などを効果的に活用し、学力を向上させる指導法の工夫
五條市立阿太小学校 教諭 杉崎 明子 5
- 4 基礎・基本を身に付け、たくましい体をもった子どもの育成
～基礎的な力を高める取組を通して～
十津川村立平谷小学校 教諭 保田 昭文 7

生徒指導の部

- 5 学級活動を基にした学級経営について
橿原市立畝傍南小学校 教諭 伊禮 徳彦 9

学校教育目標の具体化の部

- 6 教職員がチームとして取り組む道德教育の推進に向けて
大和郡山市立平和小学校 教諭 片岡 幸一 11

【中学校】

生徒指導の部

- 7 現代の課題に対応できる積極的な生徒指導の在り方を求めて
大和高田市立片塩中学校 教諭 中井 義勝 13
- 8 生徒のよさを引き出す開発的・予防的生徒指導の在り方
－ 本校生徒指導上の課題克服に向けて －
広陵町立真美ヶ丘中学校 教諭 中谷 昇 15

学校教育目標の具体化の部

- 9 生徒の心をつかみ、生徒に次の一步を踏み出させる指導
橿原市立光陽中学校 教諭 喜彦 雅彦 17

【高等学校】

学習指導の部

- 10 学校直売所の模擬株式会社化による起業家教育の実践について
奈良県立磯城野高等学校 教諭 真井 順也 19
- 11 生徒の活動を重視した、自作実験教材による理科（物理）の指導について
奈良県立青翔高等学校 教諭 松山 吉秀 21

部活動の部

- 12 自転車競技の指導を通じた生徒の育成について
奈良県立奈良北高等学校 教諭 三好 泰彰 23

地域との協働の部

- 13 地域と連携した生徒会活動の推進に取り組んで
奈良県立高田高等学校 教諭 三木 淳照 25

1 実践内容

1年生の児童たちは、小学校生活に期待をしている反面、緊張して入学してくる。学校へ来るのが楽しみという児童の気持ちを大切にしながら、新しい環境にスムーズに慣れて行けるような取組が必要である。児童の様子を知るため、登校時に必ず一対一で挨拶をして話かけ、緊張をほぐすようにした。また、自分ではまだうまく伝えられないので、連絡帳に目を通すことで、一人一人の健康面・精神面の状態を朝のうちにつかみ、一日を始められるようにした。



(1) スタートカリキュラムの作成

就学前までは、時間を意識して生活する事は少なく、活動内容も児童主体で比較的自由である。入学翌日より、一定時間で区切られ、決まった活動をすることに戸惑いを感じる児童も少なくない。また、着席し話を聞くことが苦手な児童もいる。そのため、スタートカリキュラムを作成し、入学当初は45分間の時間を複数の活動に分けて学習した。短い時間に活動内容が変わることで、集中して学習に取り組ませることができた。

(2) 学習・生活ルールの指導

入学後の早い段階で、学習ルールを視覚的に分かりやすく示し、ルールを守れた児童を全体の前で認めることにより、学級全体でルールを守る雰囲気を作っていた。学習の基礎となる大切な事柄である正しい座り方や鉛筆の持ち方などについては、授業時間ごとに繰り返し声に出して言わせることで、子どもたち自身が意識できるようになってきた。身の回りの整頓をしやすくできるように、片付ける所やしまう所を一つ一つ細かく決め、どのようにしまうのか絵で示し、できたかどうかの確認を毎日朝の会で行った。帰りの準備で、教科書を入れている箱を空にして毎回担任に見せることで、時間内に自分で片付けたり準備したりする力を付けると共に、忘れ物をして帰る回数を減らすことができた。

(3) 配慮が必要な児童に関する指導

配慮が必要な児童に対しては、必要に応じて同学年の教員、養護教諭や管理職に連絡相談し、早めに学校全体で問題を共有するようにした。

① 登校に不安が強い児童の指導

母子分離不安で、登校しぶりが見られる場合は、児童が楽しみに感じるような学習や活動を設定したり、少しでも頑張ったことを認め励ましたりすることで、本人が学校へ安心して行けるようにした。教室に入りにくいときは、保健室でしばらく過ごして気持ちを切り替えるようにした。周りの児童には、その児童の不安を必要に応じて伝え、手助けできることを話し合った。手をひいて教室まで連れて来てくれるなど、子どもたち自身が自然にできる関係を作っていくようにした。また、保護者の不安を軽減するため、学校での様子を電話で伝えたり、担任と個別に話し合

う機会を設けたりするだけでなく、スクールカウンセラーとのカウンセリングや相談機関の紹介も行った。

② 食物アレルギーに関する指導

食物アレルギーでエピペンを使用する児童の給食指導について、入学時に保護者と繰り返し話し合いをし、給食が始まるまでに、かかりつけの主治医と面談の時間をもった。

アレルギーがある児童の給食対応に関する学校体制

養護教諭と連携を密にし、アレルギーがある児童の状況を全職員に周知し、緊急の事故に対応できるよう学校全体で児童を見守る体制をとってもらった。エピペンの保管場所やエピペン注射の仕方のマニュアルを目につきやすい所に置いてもらった。

教室におけるアレルギー対応

教室内でのアレルギー物質の混入を防ぐこと、食べられるものは、好き嫌いせず食べることを目標とした。手立てとして、アレルギーがある児童は、配膳中は前の席に着席し、給食後は、他の児童が片付けてから返却することにした。

担任や補助の先生は、除去食を確認（献立表を見て確認）する。配膳中は牛乳の入ったおかずがかからないように見ておく。給食中は、何をどのくらい食べたか、食べた量を見ておくようにした。

学級の児童には、給食開始前に紙芝居を使い、アレルギー症状がどのような状況でおきるのか、また症状が出た場合どうなるかを分かりやすく伝えた。「好き・嫌い」と区別する事で、給食時の別食やアレルギー物質が混入しないよう最初に配膳することも、スムーズに理解させることができた。



給食の盛り付け表に、アレルギーで食べられないものを色分けし、誤食を防ぐようにした。盛り付け表の近くに、保護者がチェックした献立表とエピペン注射の仕方を誰でも見られるように置いておいた。飛沫の混入を防ぐため、給食時はアレルギー児童が教卓の横、その他の児童は班になって教室後方へ離して食べるようにした。

2 成果と課題

一人一人の変化に目を配り、小さなことから認め励ますことで、児童は自信を深め学校生活へのスムーズな適応ができたのではないかと考える。学習ルールを徹底することで、安心して学ぶことができる学級の雰囲気ができていた。基本的な生活習慣が身につけていない児童については、学校だけの取組だけでは難しいので、保護者との連携を密にし、保護者から信頼され、支援してもらえるような関係を作っていく必要がある。今後、アレルギー児童が増えてくると、現在のような手厚い支援体制はできない。保護者と話し合いを進め、別室での給食など無理のない体制を考えていく必要がある。

3 その他参考となる事項

保健衛生かみしばい まい日げんき！「たべられないよ アレルギー」（童心社）
エピペンホームページ <http://www.epipen.jp>

1 実践内容

本実践では、児童が自ら平和について考えていくためにゲストティーチャーによる戦争体験談、DVDなどの映像、地域に残る戦争の跡を見学する学習を設定した。教員が一方的に教えるのではなく、児童が自然に興味・関心がわくような教材を見付け、その提示の仕方を工夫することで、児童自らが平和とはどういうことなのかを学び取り、自分の考えをもつのではないかと考えた。



(1) NHKスペシャル「少女たちの戦争～197枚の学級絵日誌～」

昨年8月14日にNHKで放送されたドキュメンタリーを録画し、学習教材として活用した。滋賀県大津市の当時5年生だった女性5人が登場し、自分たちが描いた学級絵日誌を懐かしく見ながら、当時の思いを語る内容になっている。自分たちと同じくらいの当時の小学生が戦争中にどのような思いで暮らしていたのかを知るのに適切な教材である。本教材を見る前に児童に特に注目してほしいポイントを次の二つにしぼって提示した。「夫を戦争に送る妻の思いを語る場面」と「小学生の目線から見た戦争中の生活の様子」である。その結果、次のような児童の学びの様子が見られた。

「今の私と変わらない人がどんな思いで毎日を過ごしていたのか、想像できないくらい相当過酷だったと思う。私なら自分の知っている人が戦争に行くのに『バンザイ』と言って見送ることは見るに耐えられなかったと思う。」

「戦争が身近なものになっていくにつれて、絵日誌が敵軍をにくむ内容に変わっていったことに戦争が人の心を変えてしまうのだと思った。」



(2) 中西照子さんの戦争体験談

校区にお住まいの中西照子さんに学徒動員として名古屋の兵器工場で働いておられた時の体験をお話いただいた。体験談を聞く際に児童が戦争中の生活の様子が分かるように学徒動員の写真や赤紙の写真、戦争中使用していた防空頭巾の実物を準備した。児童が戦争中の人々の思いをより身近に感じとるのではないかと考えた。その結果、次のような児童の学びの様子が見られた。

「中西さんが学徒動員で桜井駅を出発する時に歌った歌を歌われたとき、思い出して泣きそうになられていたので本当につらかったんだと思う。」

「中西さんは小さいころは学校も新聞も日本人の心もすべてが戦争のことばかりになっていた。ぼくはもう世界中で戦争はやめてほしいと思う。」



(3) 映画「はだしのゲンが伝えたいこと」とアニメ「はだしのゲン」のDVD鑑賞

映画「はだしのゲンが伝えたいこと」は中沢啓治さんが実際に現地へ行き、自分の

被爆体験を対談形式で語る映画である。この映画を見せた後、アニメ「はだしのゲン」を見せることで中沢啓治さんが「はだしのゲン」を通じて何を伝えようとしていたのかを児童が自ら読み取るのではないかと考えた。その結果、次のような児童の学びの様子が見られた。

「ぼくは中沢さんが一人でも命を大切にしたいということと言いたかったんだと思う。妹のミルクを買うためにどんな仕事でもしていたから。」

「私はこのアニメを通して、どんなことがあっても生きぬいてほしいということが伝わってきた。」

(4) その他の平和学習の内容

① 柳本飛行場跡への現地見学

本校の校区には戦争末期に建設された柳本飛行場跡がある。防空壕や滑走路跡などを見学することで戦争を自分ごととしてとらえるのではないかと考えた。

「私がときどき通る道路が、まさか柳本飛行場の滑走路だったとは思わなかった。」

「柳本に飛行場を作らないといけないぐらい戦争はたいへんだったんだなあと思った。」

② 修学旅行での被爆体験講話

広島に修学旅行で被爆体験講話を聞かせていただくことは児童が平和の大切さを自ら考えるため必要であるため、毎年行っている。

「私がもし、被爆体験をしていたら（被爆された方を）どうすることもできないと思う。理由はこわいし、何も考えられなくなるからです。」

「ぼくが一番心に残ったことは、海外に行って被爆のことを話しておられることです。ぼくたちにも受け継いでほしいと言われたのでぼくは受け継ごうと思う。」

2 成果及び課題

平和学習をするまでは人にいやな思いをさせることに抵抗のない児童が学級に数名いたが、人の思いにふれ、現地見学を実施することで戦争体験や被爆体験を自分のこととして捉えるようになった。「平和とはどういうことなんだろう」という問いに対して、「みんなが笑顔で楽しく暮らせること」、「みんなが安心して暮らせること」、「一人一人が分かり合えること」など平和学習から学んだことを根拠に自分の考えを出し、話し合いをした。学級も次第に穏やかな雰囲気になり、トラブルもなくなっていった。教員が教材研究をして児童の実態に合う提示の仕方をすれば、児童は自ら学習に意欲的に取り組み、能動的学びにつながることを確認できた。しかし、戦争体験者の高齢化でゲストティーチャーを探すことが難しいことから、普段から様々なことに関心を持ち教材確保や地域人材の新たな発掘に努めることが大切である。

3 その他参考となる事項

NHKスペシャル「少女たちの戦争～197枚の学級絵日誌」(2014年8月14日放送分)、映画「はだしのゲンが伝えたいこと」(2011年、株式会社シグロ)、アニメ「はだしのゲン」(1983年、株式会社マッドハウス)

分野番号 1 小学校 学習指導の部

ICT機器などを効果的に活用し、学力を向上させる指導法の工夫

五條市立阿太小学校 教諭 杉崎 明子

1 実践内容

本校では、『自ら考え、学び合う授業』を目指して研究を進めてきた。児童は、県の学力診断テストなどの分析から、提示された情報を整理して、筋道を立てて考えたり、わけを説明したりするなど、既習事項を活用して問題を解く事が弱い傾向が見られた。

以前まで行ってきた算数の学力をつける研修で、プロジェクターやパソコンなどのICT機器を使用することで子どもたちの学習意欲が高まることは実感されていた。そこで、確かな学力を付けるために、ICT機器や学校放送番組を効果的に活用することが有効であるのではないかと考えた。そのために、なぜICT機器を使うのか、どのような授業形態があるのかなど、教員が理論の研修をし、次に、教員のICT機器の活用能力を高め、授業を行うこと、そして、子どもたちの学びがどのように育ってきたのかを測ることの3点が必要と考え、研究に取り組んだ。



(1) 研究組織

研究を進めるに当たって、研究推進委員会で、研修の大筋の流れを決めた。そして、職員全体でICT部会と授業研究部会に分かれ研修を進めていった。ICT部会では機器の操作や授業での使い方を、授業研究部会では、授業への生かし方、児童アンケートや授業の効果の測定などを検討していった。

(2) 教員の理論研修

大学教授や教育研究所の指導主事の招聘を積極的に行った。初めのうちは、ICT機器を用いた授業についての質問や自分達のやりたい授業などについてこちらから質問内容を送って現場の先生方のニーズに応えられる研修になるようにした。理論の研修では、教科指導や特別支援教育において、ICT機器を効果的に活用して子どもたちが主体的に学習する新たな学び方について学んだ。また、ICTを使用した授業を、そのときに教えていただいた一斉学習・個別学習・協働学習という授業形態にわけた。授業のねらいに沿ってそれぞれを組み合わせながら阿太小学校としての授業を組み立てられるようにした。

(3) 教員のICT機器の活用能力を高める

視聴覚主任と連携しながらICT支援員の協力の下、電子黒板やタブレット、授業支援ソフトウェアなどを教員が使えるように研修を行った。

また、いくつかの機器を授業で使用してきた教員が使い方や授業でのアイデアなどを教える講習会も行い、いつでも気軽に聞ける体制をとった。各教室には、プロジェクターとパソコン、電子黒板かマグネットスクリーンを常に設置しておくことで、



必要なときはいつでも I C T 機器を使って授業を行えるようにした。

さらに、奈良県小中学校メディア教育研究大会での授業公開を含め、全学級が、2度の授業研究を行うことで、I C T 機器の授業での活用能力を高めるようにした。



(4) 効果の測定

子どもたちが I C T 機器を使用することにより、どのような伸びがあったかを、学年はじめと学年終わりに学校独自のアンケートをとりその成果を検証した。また、学力の向上を目指した取組でもあるので、学校独自の基礎学力を測る計算・漢字テストや県の学力診断テストなども参考に結果を検証してきた。

	1～2年		3～6年	
	5月	12月	5月	12月
授業に集中して取り組んでいますか。	2.5	2.62	3.52	3.59
じっくりと考えて自分の考えを深められていますか。			3.45	3.34
学習した内容を覚えられたと思いますか。	2.25	3	2.68	3.5
友達と協力して、学習できたと思いますか。	2.5	2.86	3.49	3.75
友達と教えあうことができましたか。			3.41	3.58
コンピュータを使った学習は、わかりやすいと思いますか。	2.5	3	3.8	3.66
コンピュータを使った授業をもっと受けたいと思いますか。	2.5	3	3.53	3.53
自分がコンピュータを使って発表してみたいですか。	2.37	2.75	2.87	3.22

2 成果及び課題

講師招聘による理論研修では、I C T を活用した新しい学習形態と I C T 機器を使った授業研究を深めることにつながった。いろいろな教科で授業研究を全学級が行い、講師先生を招聘して研修を行ったため I C T 機器を使った授業への理解が非常に深まった。

教員の I C T 活用指導力アンケートでは、教材研究、授業の活用、児童の活用を指導、校務等、それぞれの場面での I C T を活用する能力の向上が見られた。

児童アンケートから、「コンピュータを使って教科書などを映し、動画を見ることで分かりやすくなる。」といった受動的な意見から、「自分達で発表するときにタブレットやパソコンのソフトを使うのが楽しい。」というような意欲的な意見が多くなってきたのが、うれしい成果である。また、県の学力診断テストでは、ほとどの学年、どの教科でも県平均を上回っている。また、前年度に比べて伸びが見られるのは、これまでの取組の成果ではないかと考える。

今後 I C T 機器や放送番組等を効果的に利用しながら、先生方と協力し、児童がより主体的に活動する授業づくりや生きる力の伴った学力向上に向けて、研究を深化させていきたい。

3 その他参考となる事項

阿太小学校ホームページ <http://www.gojo-nar.ed.jp/adasho/>

分野番号 1 小学校 学習指導の部

基礎・基本を身に付け、たくましい体をもった子どもの育成 ～基礎的な力を高める取組を通して～

十津川村立平谷小学校 教諭 保田 昭文

1 実践内容

(1) 研究の方向性を定める（実態把握、仮説構築）

○バス通学による歩く機会の減少、外遊びの少なさ、寝る時刻の遅さ、テレビやゲームにかかわる時間の多さ、家庭学習時間の少なさ（生活実態）

○県学力テストや業者テスト、体力テストの結果の全般的な低さ（学力実態）

○「分かるようになりたい」「できるようになりたい」（児童の願いや意欲）

「分かるように教えたい」「できるようにしたい」（教員の強い願い）

以上が平成26年度研究主題を設定した背景である。学力向上には、健康な体と体力、忍耐力が必要である。また、テレビやゲームに関わる時間の減少等の「家庭生活」の変化や、休憩時間の遊びや汗をかくぐらいの清掃活動の充実等の「学校生活」の変化がなければ、向上は実現しない。そこで、家庭や学校の生活面の改善も行う。実態に基づき教職員が団結し改善を行えば学力は必ず向上するという考えのもと、取組が始まった。

(2) 具体的な取組

① 研究推進のための新たな研究組織体制を作る

文化部・体育部という行事中心であった組織の改革を行った。校長を軸に運営委員会を置き、指導部・研究部が常に研究推進の立場で話し合いができ、スピーディに実践につなげられるように組織を改編した。また、校務分掌も研究が進めやすいように作り変えた。

② 協働意識の下に全校統一の具体的目標を作る

向上項目	取組と目標
基礎計算力	・計算トレーニングや算数問題の毎日実施と状況報告 ・筆算等の計算の学習における共通理解の徹底
話す力 聞く力 学習態度	・話型の統一とその掲示 ・学習のきまりの統一とその掲示（姿勢の保持、最後まで聞く、話す） ・忘れ物なし検定の実施（学習の構えを作る） 初級（5日連続）
書く力	・ノート指導の徹底（ていねいに、早く、分かりやすく） ・漢字検定（全員合格 3学期実施） ・漢字小テスト各学級目標を設定（80～90%で範囲設定）
読解力 読書力	・『国語読解習熟プリント』を使用し、作文力、語彙力、漢字力、読解力を総合的に高めるトレーニングの毎日実施と状況報告 ・各学年の音読カードの統一 ・読書時間の設定（毎日 学校10分 家庭10分） ・読書貯金カードの統一 ・図書館に学年コーナーを創設（教科書紹介本の読書推進）



授業力	<ul style="list-style-type: none"> ・算数科公開研究授業（全学年 指導者要請） ・算数科授業のビデオ撮影や最終の板書の写真撮影による研修 ・本時指導展開案立案（略案 全時間） （めあてを立て、ねらいを明確にし、児童自身が見通しをもてる授業、授業終末に児童自身の振り返り、まとめが意識されている授業）
体力	<ul style="list-style-type: none"> ・低位にある投動作項目の体力テストを年2回実施 ・苦手な器械・鉄棒運動の向上のため本校独自カリキュラムを作成 ・外遊びの奨励と充実（業間を25分とし、毎週金曜業前に自由遊び時間25分を創設） ・全教員で投動作を高める遊具、教具、掲示物の作成、跳び箱とマットの運搬台作成、体育倉庫の片付けとネーム貼りによる整理 ・体力向上に関する指導者要請と研修実施 ・体育科公開研究授業（全学年 指導者要請）
生活習慣	<ul style="list-style-type: none"> ・月1回の生活調べの実施と結果を踏まえた保護者への啓発

2 成果及び課題

本校は山間部に位置し、教員の異動が激しく、教育経験が少ない教員も多い。教職員が一方向で取り組むことや全教職員が取り組むこと、子どもの自立に向けて打合せと準備を十分に行うこと、努力や実践の成果を残すこと、異動があっても取組の低下を招かないことを大切に実践し、年度の終わりに研究冊子を作成した。冊子作成のために年度初めには、個々に「年度末に研究冊子に研究経過と結果を載せること」を意識してもらい、実践が成果へとつながるように道筋をつけた。次年度、完成した研究冊子を基に、新赴任者を含む全教員に取組を解説しながら、継続的計画的な研修の推進に努めた。

平成25年度の課題や平成26年度行事（奈良県後期体育研究発表校等）を踏まえ、平成25年度末から少しずつ提案、協議を重ね、平成26年度初めからすぐには実践が行えるよう調整した。特に保健体育部との連絡・調整・連携を綿密に進め、これが体力や投動作の項目の向上に繋がった。学力テストが概ね県平均を超えたり、発言・発表力の向上が見えたりしている。元気な挨拶姿勢や外遊びの多さも見られ、生き生きとした生活スタイルが定着し始めている。良好な友達関係や学習環境が、整い出していると思える。

実態を把握し、仮説を立て、方向性を明確にし、PDCAサイクルを意識し研究を進めたところ、効果を上げた。スピードのある実践力や推進力は、全体で十分に協議され、協議内容をもとに計画立案を徹底し、事後の反省を十分に行うことで生まれる。個々や各部への連絡と連携を図るための調整の重要性を再認識した。更にこれらの取組を継続的に反映させ、工夫改善を重ねながら推し進めることが大切である。そのために、学校評価を計画的に行い、改善し、実行し、再度評価するというような仕組みづくりや、良い点や改善点等を全員が把握し、通常の学校生活で全教職員が指導及び支援する態勢づくりに努め、教育効果が上がる教職員集団づくりに、研究主任として更に励みたい。

3 その他参考となる事項

実践の詳細については、本校『平成26年度 研究のまとめ』冊子に記載。

1 実践内容

児童にとって居場所があり、安心して過ごすことができる学級。自分の思いを何でも言うことができ、誰のどんな意見でも聞くことができる学級。そして、児童の思いや願いが叶う学級。そういう学級であれば、児童は心を開放して素直になり、自分のことだけではなく仲間を気遣えるようになり、よりよい人間関係を築くことができる。安心した空間で安定した人間関係があれば、児童は、学習活動をはじめ様々な活動に対して意欲的に、自主的に取り組むようになっていく。



このような学級集団をつくるために、学級活動を学級の中心に据え取組を進めてきた。また、この学級活動のよさを、伝え広める活動に積極的に取り組んできた。

(1) 学級活動の充実

学級活動に取り組む過程で、児童は自分が決定したことを実行していくことになり、そこには責任感が生まれる。話し合った決定事項をやりとげることで達成感を感じ、それらの活動を互いに評価し合うことで自己有用感が育まれる。学級活動で高まった意欲は、学習活動にも生かされ、児童は積極的に物事に取り組むようになる。



このように学級活動は、学級経営の基盤となる。学級活動を充実させ、学級づくりが児童にとって心地よいものになれば、児童の学校生活がより充実したものになる。学級活動の時間を大切にし、児童の自主性を育んできた。

(2) 自校の学級活動の充実

自校の教職研修に模擬学級会を計画し、先生方に学級会を実際に体験していただいた。同時に、系統立てて学級活動に取り組むための組織づくりを行い、特別活動全体計画、各学年各学級の年間計画を見直した。また、学級活動の公開授業を行い、実際に児童が行う学級会を見ていただき、学級活動が児童にとって学級にとって大切なことを校内に伝えた。

(3) 他校に学級活動を広める

奈良県教科等研究会特別活動部に所属し、他校に広める活動を行ってきた。

奈良県教科等研究会特別活動部では、毎年夏にサマーセミナーを開いている。そこで、他校の先生方に模擬学級会を体験していただき、その上で学級活動の大切さを伝えた。サマーセミナーの模擬学級会には、毎年約60名の先生方に参加をいただいている。

平成26年秋の奈良県特別活動研究大会は田原本町立南小学校で150名を超える参

加者のもと開催された。奈良県教科等研究会特別活動部事務局長として2年間、研究と大会運営に関わらせていただいた。

4年前から、初任者研修に学級活動の実践報告者として発表させていただいている。そこで、学級活動が学級経営の基盤となることを伝えている。

郡市の特別活動部会に講師として参加する機会にも恵まれ、実践報告を行い学級活動の大切さを伝えた。

奈良県教育委員会特別活動指導委員として、他校の校内研修に講師として参加してきた。模擬学級会を体験していただく内容や、校内研修の授業公開についてアドバイスをさせていただいた。



2 成果及び課題

- ・ 児童は、学級活動を繰り返す中で、自分の思いを言えるようになり、学級の中で安心して生活し、笑顔があふれ生き生きと活動するようになった。
- ・ 児童は、体験活動を通して、仲間とつながり、学級への所属感を高め、意欲的に活動するようになっていった。学級活動だけではなく、教科の授業でも発言する児童が多くなり、学習に意欲的に取り組むようになっていった。
- ・ 他校の先生方は自分が実際に体験することで、学級活動の面白さに改めて気づかれていた。また、自分の学級でも取り組んでいこうという意欲を駆り立てることができた。
- ・ 学級活動は学級経営の基盤であるので、すぐに効果はでない。継続して繰り返し取組を進めていく必要がある。
- ・ 年度当初に学級活動の年間計画を作成し、全校で統一して学級活動の取組を進めていく必要性を、自校だけでなく他校でも何度も伝えていかなくてはならない。
- ・ 学級活動への意欲を駆り立てることはできても、その後学級活動を充実させているのかどうかについて、検証していく取組を模索していきたい。

今後も、これらの成果と課題を意識しながら、自分の学級から自校、他校へと学級活動を広めていきたい。

3 その他参考となる事項

参考文献

「楽しく豊かな学級・学校生活をつくる特別活動（小学校編）」

国立教育政策研究所（平成26年8月）

「評価規準の作成、評価方法等の工夫改善のための参考資料【小学校 特別活動】」

国立教育政策研究所 教育課程研究センター（平成25年11月）

「学級活動ってなあに」 奈良県教科等研究会特別活動部（平成26年9月）

1 実践内容

数年前より始業のチャイムが鳴っても教室に入ることができない、また教室内で立ち歩いて授業に集中できない等、学校生活の中で「あれ、ゆれ」を示す児童の姿が目立つようになった。家庭環境に問題を抱え、時代の移り変わりと共に変容していく児童の実態を踏まえ、本校の目指す子ども像に迫るべく研究主題に「道德教育」を据え、「心身共に健康な児童の育成」を願い研究推進を行った。私は研究主任及び道德教育推進教員という立場にあり、「道德教育」について研修会等で学んできたことを本校の教職員に伝え、広めていく中で学校がチームとなって取り組む道德教育の推進に従事している。



(1) 推進リーダーとして



平成21年度から平成26年度の6年間は研究主任、平成23年度から本年度（平成27年度）までの5年間は道德教育推進教員を担当している。本校の研究主題に迫るべく、道德教育を推進する上で単なる道德教育のファシリテーターの役割だけでなく、コーディネーター、アドバイザー、サポーターなど多様な役割を行っている。さらに自らが率先して研修会や研究大会に参加し道德教育について学びを深め、積極的に授業を公開したり、他の教員の授業を参観しアドバイスを行ったりしている。

(2) チームとして取り組む道德教育

① 平成24年度

- ・生活リズムの安定を目指し、10分間の朝の読書タイム（毎日）の実施。
- ・きめ細やかな指導を目指し、「学習のきまり」「発表のきまり」を全校で統一。
- ・道德教育全体計画を全面的に見直し、作成。
- ・道德教育の実践を行っている方々を講師に招いての校内研修。
- ・校内授業研究及び各部会毎による授業公開。（＊平成24年度以降毎年実施）
- ・保護者へ取組を知ってもらうために道德参観（年1回）を実施。

② 平成25年度

- ・重点内容項目に「節度ある生活態度」「生命尊重」を設定。
- ・基本的な生活習慣、規範意識、人間関係を築く力、社会参画への意欲や態度等を育成するといった観点から、学年の実態に応じた教育実践の積み重ね。
- ・各教科等と道德教育の関連性を明確にした道德教育年間計画の別葉の作成。
- ・「道德コーナー」を設置し授業で活用した教材・教具やワークシートなどの保管。

③ 平成26年度

- ・重点内容項目に「勤勉・努力、不撓不屈」「思いやり、親切」「生命尊重」「公德心、規則の尊重」を設定。

- ・ 道徳教育指導者養成研修近畿ブロックに参加し、研修内容を校内へ伝達。
（「特別の教科 道徳の動向」「指導案の作成」「主発問や補助発問の工夫」等）
- ・ 毎月発行している学年だよりに「道徳に関する内容」を掲載し保護者へ通知。
- ・ 道徳アンケート（年3回）の実施。
- ・ 道徳的価値に迫る授業作り。
- ・ 「私たちの道徳」の読み物資料を年間計画の中に位置付け積極的に活用。
- ・ 「奈良の子どもの未来を拓く道徳推進事業（奈良県教育委員会の指定）」の研究大会において3年間取り組んできた研究内容を発表。

④ 平成27年度

- ・ 重点内容項目に「節度ある生活態度」「思いやり、親切」「公德心、規則の尊重」を設定。
- ・ 教職員の実践に役立ち、より道徳性を高めることのできる道徳資料の紹介。
- ・ 児童一人一人の道徳的価値に迫る授業づくりに向けた授業展開のアドバイス。
- ・ 「特別の教科 道徳」に向けてこれまでの実践と課題を踏まえ、完全実施に向け評価の在り方についての研究推進。
- ・ 5時間目開始前の10分間を「平和っこタイム」とし、基礎学力向上を目指す。

2 成果及び課題

道徳教育に取り組むきっかけともなった、様々な課題を抱える児童の「あれ・ゆれ」は以前に比べ随分と落ち着きが見られるようになった。「チームとして道徳教育を行うことで児童の姿が変容していくだろう。」という仮説の基に取組を継続してきた大きな成果だと言える。道徳教育に取り組み始めた当初は、どの



のような授業を行い、どのように指導したら良いのか分からず試行錯誤でのスタートだった。しかし、1年、2年と少しずつ学習に活用した資料を保管し実践を重ねることで教職員の意欲が高まってきた。さらに平成26年度に県の研究指定を受け研究発表会を開催できたことは、多くの教職員の大きな自信に繋がった。平成30年度から完全実施となる「特別の教科 道徳」に向け、まだまだ不十分な所もあるが「道徳の授業のやり方が何となく分かってきた。」「普段の授業では目立たない児童が、道徳の時間に発表してくれる。」等、教員が道徳授業に対して積極的に取り組むようになった。

道徳と他の教育活動との関連性に目を向けた時、体験活動や経験を重ねるだけで終わる活動がまだまだ多い。様々な教育活動と道徳教育の関連性を明確にし、道徳教育だけでなく様々な教育活動の中での取組を積み重ねることによって児童一人一人の豊かな心を育てると共に道徳性を高めていく必要がある。

3 その他参考となる事象

大和郡山市立平和小学校ホームページ <http://yamatokoriyama-es.mimoza.jp/heiwa-es/>

1 実践内容

(1) 本校の現状

10年程前までは、いわゆる「荒れ」・「ゆれ」による生徒指導の困難さを多数抱えてきた。在籍生徒は1000人を超え、教員の数も多く、本校での様々な生徒指導上の課題への組織的な対応に慣れた教員も数多くいた。最近5年間で12学級、教員も20名以上減少して顔ぶれも一気に変化した。さらに、対応事例の内容や生徒の様子も変化してきた。ゆえに、生徒の状況、教員の数やその特性に合わせた対応手段の開発と、組織的体制の再構築、若手の育成と役割の世代交代、変化に順応した対応へ向けた意識改革と研修が急務となっていた。



(2) これまでの取組

不安定で衝動的、衝動性ゆえの連鎖、繰り返しなど、新たな課題を含む問題行動が増加し、組織的かつ人間的信頼関係を基盤にした対応だけでは限界を感じる場面が増えた。一事象での対応が毎日かつ長期間にわたり、見通しも立てにくく、対応する教員の情熱と体力だけが頼りの対応も増えた。終わりの見えない不安を感じながら、体力ばかりが奪われ、疲弊していく教員も多くなっていった。

そこで、生徒だけでなく、教員も自分一人で抱えることなく、安心して心穏やかに日々の活動に取り組める状況や環境をつくるという積極的、前向きな対応に重点をおき、次のような取組を行ってきた。

- ① 8年ほど前、生徒の様子の変化をきっかけにストレスマネジメント教育に取り組み始めた。漸進性弛緩法などのストレス解消法の学習や、アンケートを行い、自分のストレスの度合いや種類を知り、各自が対応できることを目指した。
- ② 漸進性弛緩法を毎日学級で一斉に取り組むことには困難さを感じた。その後、1年生での学習等は毎年続けているが、各学級で毎日一斉に体操することは控えている。体操中に流していたヒーリング音楽だけでも続けようと、校内一斉放送を利用して朝の会の時間中ずっと流すようにした。現在では、朝の会の開始20分前から別のヒーリング音楽を流しており、登校直後から授業が始まるまでの時間でリラックスし、少しでも落ち着いた状態での一日の始まりを目指している。
- ③ ①のアンケートの得点が、指標と比べて全体的に高い状態が続いていた。その他にも別のアンケートを実施する機会があったが、同じく高い傾向が見られた。そこで、平常時からの継続的な調査の重要性を感じ、定期的の実施することにした。試行錯誤の結果、現在は各学期の始め（年間計3回）にストレスチェックを行い、生徒の状況や変化を客観的に把握するための資料として活用している。
- ④ 本校では、不登校傾向を示す生徒の数が非常に多く、10年ほど前から、市の適応指導教室の協力も得ながら対応を進めてきた。ただ、それでも個々の状況の微妙な差異や、急な変化への対応には苦慮してきた。突然の変化にも即時、適切に対応すべく、教育相談部の活動をより活発化した。毎週各学年の教育相談部担当者が各学級担任に現在の状況の聞き取りを行う。次に毎週の部会で、各学年での情報を書面でも出し合いながら複数教員で共有し、生徒指導部やSCも交えて対応の検討も行

う。各学年の担当者が再度各学級担任に検討内容を還元し、今後の相談にもものるなど、常時複数教員による検討と対応を行うことを原則とした。

4年前からは、様々な状況にも対応できるよう別室を新たにつくった。その活用の形態についても、教育相談部を中心に検討し、適応指導教室とも密接に連携しながら学年教員全体で対応し、複数対応を可能にする状況づくりと学級担任への負担集中を回避している。

- ⑤ 家庭環境や親子関係等の学校生活以外の条件が原因で、自傷行為、自殺企図にまで到達することも増え、学校やカウンセリングだけでは対応できない事例も毎年複数発生している。そこで、③のアンケートの結果をSCと教育相談部で専門的な視点を踏まえての分析、検討を行い、経験の浅い教員でも、表面に現しにくい生徒でも、危険度や変化を早期発見できるシステムの構築に努めている。

生徒が、初めて秘めていた事を語ったときにその話を聞いた大人の言葉がけや初期対応がもっとも重要なだけに、全教員が適切な知識と対応する力を備えていることが必要である。そこで、自殺予防や臨床心理学的な視点の職員研修等も複数回行いながら、これらの事象への対応力向上を図ってきた。

- ⑥ 「学校にいと落ち着く」と思える環境づくりとして、学校敷地内に常時数百本の花を咲かせるようにしている。破損部分なども即時修理を徹底し、少しでも気分が良くなる空間作りと空気の醸成に取り組んでいる。
- ⑦ 様々な問題事象が起こってから対応するだけではなく、事前予測にも積極的に取り組み、心も含めた準備を進め、受け身の対応にならないようにしている。予測には、アンケート結果の分析だけでなく、気候変化の具合や気圧、過去の様々な統計など、使えるかもしれないと思えるものは何でも活用している。

2 成果および課題

(1) 成果

当初は、ストレスマネジメントやストレスアンケート等を活用し、生徒の日常生活における根本的な部分での落ち着きを目指し、変化の早期発見など未然防止を踏まえたいわゆる積極的な生徒指導の取組として考えて進めてきた。

しかしながら、取組を進めていく中で、我々教員自身が今まで以上に各生徒のストレスや心の状態、置かれている生活背景やその変化に気を配り、より注意深く観察するようになったことのほうが大きな成果であったと感じる。

また、生徒個々の家庭環境の変化や友人関係の変化などに関する会話が、職員室内でも多く行われるようになり、時間を作った会議ではなく、日常会話での随時の情報共有が進められ、複数教職員による適時適切な対応につながっている。

(2) 課題

諸先輩から受け継いだ生徒指導のよさと新規の取組の前向きな融合、生徒保護者との人間関係を基盤にした、組織的で教員も安心感をもてる対応を継続するには、大小様々な集団における適切なリーダーの存在が不可欠である。そのようなリーダーが継続的に育成される環境や仕組みの構築に今後も努力していきたい。

3 その他参照となる事項

「心とからだの健康観察と教育相談ツール集」 富永良喜 編著 あいり出版
自傷行為の理解と援助―「故意に自分の健康を害する」若者たち 松本俊彦 著
日本評論社

分野番号2 中学校 生徒指導の部

生徒のよさを引き出す開発的・予防的生徒指導の在り方

ー 本校生徒指導上の課題克服に向けて ー

広陵町立真美ヶ丘中学校 教諭 中谷 昇

1 実践内容

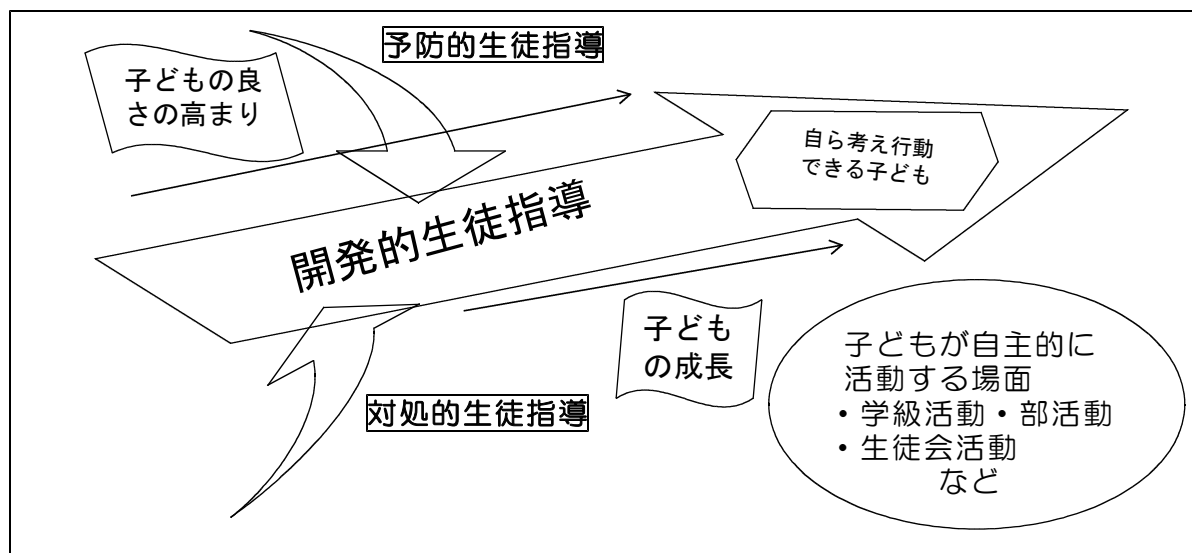
本校生徒指導の基本方針である「生徒の自主的活動により生徒のよさを引き出す開発的生徒指導の確立」を基に、ここ数年対処的生徒指導に追われていた本校の状況を克服するため、生徒指導部では以前よりいじめ・不登校・問題行動を含めた様々な事象の予防に取り組み、生徒・教職員が一体となり、学校行事・生徒会活動・ボランティア活動等を積極的に推進している。



なお、本校の生徒指導上の課題は、全国比を越える不登校生徒の多さ、ネグレクトなどの虐待やいじめの増加であり、その背景には、校区における人間関係の希薄さやニュータウン特有の保護者の高学歴志向による抑圧等により、思春期に学校不適應の状態や家庭内での軋轢を生み出すからだと考えられる。

また、本校の生徒はニュータウンに居住していることから、地域の文化に触れる機会も少ないことから、今後は地域の奉仕作業とともに汗を流したりする機会を設定するなどして、地域の人々との交流を進めていくことが必要である。

そこで、本校では、不登校生徒解消のための居場所づくりや不登校生徒・別室登校生徒への受入れ態勢の強化に力を入れるとともに、生徒の自主的活動を支援する取組を企画・立案することに力を注いできた。以下は本校の生徒指導方針のイメージ図である。



(1) 教育相談活動のより一層の推進を図り、教員と生徒の人間関係を深める取組

- ① 「ふれあいタイム」を学期に1回開催し、生徒が抱えている悩みを共感的に受け止める機会を設定し、生徒・教員間の人間関係の構築に努めている。
- ② 「なごみ教室」を設置し、全教員を対象に時間割の中に別室登校生徒を受け入れる時間を設定し、教室に戻るための継続的な支援を行っている。また、生徒の声を受け止める場として、悩み相談ポストを設置をしている。
- ③ スクールカウンセラーと協力し、豊かな心を育む取組を企画・立案するとともに

教員相互の情報交換を緊密にし、その情報を教育相談部で共有化している。

(2) 学級・生徒会活動を通して生徒に自己決定の場を与え、自己肯定感をもたせる取組

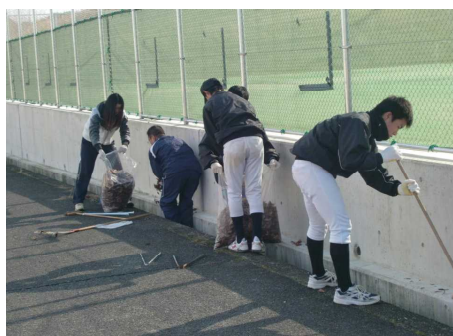
① 教職員のみならず生徒会を中心とした自主的活動により、いじめをなくす取組を継続的に進めてきた。「いじめを考えるキャンペーン」を展開し、生徒・教員・保護者が一体となって昨年度に引き続きNHKの「100万人行動宣言」プロジェクトに精力的に取り組んでいる。また、生活委員会が中心となっていじめ防止啓発ポスターを作成・掲示し、全校生徒にいじめ防止を呼びかけをしている。

② 「心とまわせる環境づくり」の一環として環境委員会が中心となって提案し、十津川高校に製作依頼した木製ベンチを設置したりするなど、中庭の環境整備を進めている。また、春・秋期には中庭を昼食場所として開放し、学年を越えた交流を進めるとともに、地域の人材を活用したミニコンサート等の企画も検討している。



③ 生徒会を中心にあいさつ運動を推進し、明るく大きな声であいさつできるように、毎朝校門に交替で全校生徒に呼びかけを行っている。また、生徒が主体となって体育大会、コーラスフェスティバル等の学校行事の企画・運営に積極的に参加している。

(3) 地域に支えられて自分たちが学校生活を送れることを感謝・自覚させる取組



① 地域への感謝を込めて、学期毎に「かつらぎの道」や学校周辺の道路や公園等の清掃活動を行っている。また、毎週金曜日の早朝、生徒会を中心に「かつらぎの道」のボランティア清掃を実施している。

② 地域住民と連携をとり、地域の防災活動を進めていく取組を企画している。避難所設営およびシェイクアウト訓練の実施、自治会と生徒会との協議を通じて、生徒の自治防災能力を養う取組を進めている。

議を通じて、生徒の自治防災能力を養う取組を進めている。

2 成果及び課題

本校が対処的生徒指導に追われていた状況を脱するために、学校体制として開発的・予防的生徒指導へ大きくシフトすることにより、主体的な生徒の活動が随所に見られるようになった。また、そのような活動を通じて学んだ知識や体験が学校生活のさまざまな場面で活かされていることを感じている。その一方、生徒を活動させるための教員側の事前の周到な準備が必要で、今後は生徒を主体とした取組の内容を精選しつつ、それに加えて、PTA・地域住民の協力を得ながら、生徒の自主的活動を進められるようさらなる学校改革の提案を進めていくつもりである。

3 その他参考となる事項（参考文献）

八並光俊、國分康孝「新生徒指導ガイドー開発・予防・解決的な教育モデルによる
発達援助」図書文化、2008.10

長瀬拓也「ゼロから学べる生徒指導」明治図書、2014.12

1 実践内容

本校の目指す学校像は、「夢と希望のもてる学校」である。具体的には、「人権尊重の精神に徹し、心豊かな生徒の育成を図るとともに、集団生活を通してともに学び合い、自己実現の喜びや充実感や成就感を味わわせ、夢と希望のもてる学校を目指す」と示されている。さらに、重点目標には「信頼される学校の創造」として、「生徒の願い、保護者・家庭・地域の期待に応える学校づくり」がある。日々の取組において、この目標を達成するためには、教師自身が「夢と希望」のすばらしさを訴え続け、生徒に高いモチベーションをもたせる事が大切であり、特に、学校生活においては、生徒指導と部活動指導の重要性を痛感せずにはいられない。



(1) 生徒指導について

日々の生徒指導において、一方的、また高圧的な指導をするのではなく、常に生徒の様子をしっかりと見つめた指導を私は心掛けている。生徒同士のトラブルの指導においては、まず双方の意見を十二分に聞くところから指導を始める。事象のみにとらわれず、それぞれの生徒の生活環境や現在の友達関係など、状況をしっかりと把握してから指導に当たっている。また、生徒の心に訴える話し方、聴き方を心掛けることによって、生徒が少しでも心を開き、時には涙を交えた話し合いになることもある。普段から何気ない会話を生徒と多く交わすことで人間関係を築き、突発的な事象が起こっても効果的な指導に繋がっている。

私が最も大切にしているのは指導の最後の場面である。それは、指導が生徒の心に響き、納得したかどうかをしっかりと確認することである。これは、講師として経験を積んだ小学校において、発達段階に応じた話し方や結び方を学んだことが大きく役立っている。このことが、生徒と保護者を併せた理解・納得・了解へと繋がっていく。さらに、家庭訪問等により、家庭との連絡を密にし、普段からの信頼関係を構築することで、保護者と学校が生徒を中心に据えてベクトルの向きを同じくし、より良き方向へと進んでいくものとする。

(2) 部活動の指導について

本校に赴任以来、吹奏楽部の顧問として指導を続けている。「音と心のハーモニー」をモットーとし、吹奏楽コンクール、アンサンブルコンテストに向けた練習はもとより、学校行事の式典演奏や地元地域の行事にも積極的に出演させていただいている。地域の方々からは、演奏はもとより、部員の礼儀正しさ等も評価していただいている。私は、地域行事に出演の際には「初めて吹奏楽を聞いて下さる方々に喜んでいただける演奏」を部員に常々訴えている。部員みんなが私の思いを受け止め、精一杯の演奏をしてくれることが、毎年、地域行事への出演に声をかけていただけていることに繋

がっていると確信している。今後も積極的に地域に出向き、たくさんの方々に生徒の頑張りを披露できればと考えている。個人の練習の成果は校内ソロコンサートという形で保護者に紹介している。楽器を持って間もない1年生が緊張しながらも一生懸命演奏し、2・3年生は個々の演奏技術向上の成果を披露することで、保護者に部員の成長を喜んでいただいている。

また、今年度の奈良県吹奏楽コンクールにおいて初の「金賞」を得たことで、生徒たちは「努力は必ず報われる」ということを実感し、次の目標に向けて練習に励んでいる。

さらに、講師時代より多くの諸先輩方から教わった「部活動から生徒指導を」ということも常に心掛けている。具体的には「返事・挨拶・行動」である。これは、人として大切にしてほしい基本的な事柄であり、社会に出たときに自らの力となることを願い信じて、日頃から積極的に取り組み、夢や希望の実現のため、地域・保護者との連携を大切にしながら、日々の活動に邁進している。



2 成果及び課題

私は本校での勤務が3年目を迎えるが、所属する学年や吹奏楽部は目指す目標に向かって前進していると実感している。生徒指導には様々な手法が考えられるが、単に上から目線の指導ではなく、生徒も保護者も理解・納得できる方法で解決の糸口を常に模索している。また、学年の先生方とは常に連絡を密にし、スムーズな生徒指導が行えるよう努めていることはもちろんのこと、他学年の先生方との情報交換を大切にすることにより、生徒理解に役立ててきた。

今、私がミドルリーダーとよばれる年齢に達し、若い先生方が急増していく中で、先輩の諸先生方から教わってきたことを、今度は私が次の世代に伝えていくことが、これからの大きな課題である。それは、単なる過去の私の経験の押しつけではなく、方向性を示唆していくことで、日々の教育活動が有益な経験の積み重ねになるような伝え方を追求していきたいと考えている。

分野番号 1 高等学校 学習指導の部

学校直売所の模擬株式会社化による起業家教育の実践について

奈良県立磯城野高等学校 教諭 真井 順也

1 実践内容

平成24年度より本校に着任し、農業クラブ顧問として「地域と共にある学校づくり」を目指して、特に学校直売所を軸にした実践型教育の展開に取り組んだ。地域と専門高校生の日常の接点にあたる直売所の経営をとおして、スペシャリストの資質の一つである起業家精神を育成するために取り組んだ、以下の教育実践について報告する。



(1) 学校直売所の模擬株式会社化

従来、本校直売所では、農産物販売の場所と時間（毎週火曜日、放課後）は共通していたものの、農業系学科各専門コースで個別に販売活動をしており、一つの店舗としての特徴や責任が曖昧な部分が多くあった。そこで、平成25年度より農業クラブ本部役員による直営店とし、本部役員主導による店舗改革を支援した。その過程で、屋号「しきの彩」やマスコットキャラクター「しきの いろどりん」が誕生し「店の顔づくり」が進行する。更に、生徒たちは、平成26年度に、校内農業クラブ総会を経て「模擬株式会社 直売所『しきの 彩』」を設立。株主を全農業クラブ員とし、直売所の経営目標を明確にした。模擬株式会社という組織的な枠組みをもつことで、学校直売所を具体的な「地域貢献の場」「実践学習の場」として位置付けた。



(2) 学校直売所の経営による起業家精神の育成

「起業家精神の育成」は本校の重要な教育課題である。学校直売所の活動には「生産→商品化→販売」の6次産業の学習要素が全て備わっている。6次産業の成功には、起業家としての資質・能力が不可欠である。すなわち、情報活用力・プレゼンテーション力・コミュニケーション力・組織力等を身に付ける必要がある。従来の生産的学習に加え、商品化や接客・販売活動を継続することで、生徒が6次産業について学び、起業家資質を複合的に高めることができる具体的な教育ツールとして学校直売所を有効活用した。

(3) 学校農場における栽培体系の特色化

学校直売所で販売する農産物の価値を一層高めるため、担当する生産科学科・生物生産コース（平成27年度より農業科学科・食料生産コース）の実習農場における栽培体系の特色化に取り組んだ。食用作物分野では、イネ栽培における無農薬栽培や疎植栽培、水田養魚等の環境保全型農業に関する生徒の研究活動を支援した。また、畑作物分野では、マメ類・雑穀類栽培における不耕起栽培を導入し、果樹分野では、カキ

栽培における徒長枝の積極的な活用による樹体の健全育成に取り組んだ。

2 成果及び課題

模擬株式会社としての活動の過程で店舗経営や商品開発を学ぶための社員研修も実施。県内数か所の直売所や企業の視察を行った。これらも参考に進めた様々な販売促進活動の結果、平成26年度の年間売上総額は140万円を超え、前年比約40%の売上増となった。年間来客数は年度当初の到達目標1000人に対し、2400人を超える結果となり、具体的な地域貢献がはかれた。



また、学校直売所での実践活動や栽培体系の特色化における生徒の研究活動については、平成25年度近畿学校農業クラブ連盟プロジェクト発表区分「食料・生産」優秀賞、平成25年度毎日農業記録賞高校生部門地区入賞、平成26年度近畿学校農業クラブ連盟意見発表区分「食料・生産」優秀賞等、校外の研究大会等での評価につながった。

学校直売所の活動の中で、生徒達は、株主総会や精算業務などの実務を学んだだけでなく、毎回の店舗のディスプレイや接客の工夫、商品開発等の過程で、仲間との相談・対立・協力を繰り返し、地域のお客様から褒められたり、注意を受けたりと、多くの成功と失敗を体験した。

本校の直売所は、校舎と校舎を繋ぐ渡り廊下を屋根代わりにした、吹き抜けの空きスペースで営業している。専用に設けられた特別な場所ではないが、生徒会や美術部等の協力も得て、直売所オリジナルの「のぼり」や販売員のユニフォーム等も作成でき、外観の華やかさも演出できるようになった。農産物だけでなく家庭科の実習成果物も大きな魅力の一つとなっている。入口も壁もない「店舗」の前にできるお客様の行列は、見慣れた風景となってきた。学校の特色や生産物の品質、お客様の期待・販売方法の工夫等、様々な要素を総合的に感覚的に捉えることのできる学校直売所は、生徒にとっての「生きた教材」となることが期待できる。

今後は、より組織的な運営や、付加価値創造等の更なる実践学習を支援したい。そして、学校直売所による継続的な地域貢献をとおして、起業家精神の育成を図り、生徒の「生きる力」を高めていきたい。

3 その他参考となる事項

奈良県立磯城野高等学校ホームページ <http://www.nps.ed.jp/shikino-hs/>

分野番号 1 高等学校 学習指導の部

生徒の活動を重視した、自作実験教材による理科（物理）の指導について

奈良県立青翔高等学校 教諭 松山 吉秀

1 実践内容

理科（物理）の指導においては、教員が作った自作実験教材による指導が生徒の興味・関心を高め、生徒自らが作った自作実験器具による探究活動が生徒の問題解決能力を高めることを実践し報告した。（平成8年度奈良県教職員教育研究論文）。その後、身近な素材による、原理のよく分かる物理教材の自作を自らの理科（物理）教育の柱として、生徒の興味・関心を高める効果的な理科（物理）の指導法の研究を今日まで継続し、授業実践とSSH事業推進に取り組んだ。



(1) 教材の開発

オリジナル教材を毎年開発し、授業改善に取り組んだ。探究活動の指導のための「極太ストローを用いた光の反射実験」は、作図や観察を繰り返すことで、光の反射に関する探究を進めることができ、課題研究の方法を無理なく学ぶことができる新しい教材として、高く評価された。（写真1）



写真1 極太ストローを用いた光の反射実験風景

(2) SSH事業の推進

SSH事業では、全国にない本校独自の企画を立ち上げた。とりわけ、生徒が企画と運営を行う公開実験を指導し、生徒の問題解決力やコミュニケーション力の育成をすすめた。

① 「サイエンススクエア」について

学期に1回の実施をしており、5年間継続している。科学部生徒が昼休みの中庭で公開大実験を行い、全校生徒の科学への興味・関心を高めることを目的としている。（写真2）



写真2 サイエンススクエア（遠心力による噴水実験）

② 「サイエンスクエスト」について

年に1回実施をしており、3年間継続している。県内小中学生対象のグループ参加による科学クイズコンテストで、楽しく科学を学ぶことを通して、参加児童・生徒の科学的リテラシーを育成することを目的としている。

③ 「青少年のための科学の祭典」全国大会について

平成10年度から平成27年度まで、全国大会連続17年間毎年異なったオリジナルの実験を生徒とともに展示している。

2 成果と課題

全国初の理数科単独高校として開校した青翔高校は、奈良県あるいは日本の理数教育の拠点校として充実した実践と成果を出すという大きな役割を担っていると考える。SSHの指定以来、日本の科学技術の発展を担う研究者を育てる理数教育を推進するために、校長を中心として、教職員が一丸となって知恵を出し合い、本校の独自となる実践を行ってきた。私は、中堅教員、若手教員のリーダーとして、SSH各事業を進めてきた。とりわけ授業における「探究活動」や生徒が企画・運営を行う「サイエンスクエスト」「サイエンススクエア」「青少年のための科学の祭典」の指導を通して、問題解決力やコミュニケーション力の高い生徒の育成を目指してきた。その結果、学会における発表数やコンテストの入選数が飛躍に増加することになった。それにもなって、研究者の道をすすむことを決意し、在学中に培った問題解決力やコミュニケーション力を生かして、国公立大学進学という進路実現を果たす生徒も増えてきた。

「極太ストローを用いた光の反射実験」によって、設定科目「探究科学」で課題研究の方法を学んだ生徒（物理グループ）は、自ら課題を設定した探究活動の成果を研究発表し、平成24年度日本物理学会ジュニアセッションでは「奨励賞」を、平成26年度日本学生科学賞奈良県審査では「最優秀賞」を受賞した。この教材による指導法は、平成26年度東レ理科教育賞「佳作」の受賞にいたった。

また、近隣の小学校・幼稚園への出前実験授業やイベントでの実験の展示によって、地域連携にも取り組んでいる。「出前実験授業」や「サイエンスクエスト」、「サイエンススクエア」において生徒が行う公開実験は、奈良新聞やNHKテレビに多数取り上げられ、地域社会の関心はきわめて高くなっている。

私は、生徒の発想力には、無限の可能性があると考えている。今後の課題は、生徒の興味や関心・自主性をさらに高めて、豊かな発想を育て、社会問題の解決につながる「イノベーション」を発起する生徒の育成を実践していくことである。

1 実践内容

本校自転車競技部は昭和56年昭和4月に、地元奈良国体（わかさ国体）強化拠点校としてスタートした。平成6年4月に、前身である北大和高校に赴任以来、「卒業後、様々な苦難な状況にも自らの力で打破することや、困っている人の風よけになれる人間になってほしい。」という願いがこめられている部訓の「自走不息（じそうやまず）」の精神と、「食欲（自己満足しない）」・「我慢（途中で投げ出さない）」・「挑戦（たくましい心構え）」・「勝負根性（勝ちにこだわる怯まない気持ち）」を部のモットーに、自転車競技力の向上と、生徒の人間的な成長を願って指導を行ってきた。



本校では、自転車競技部はどのようなクラブなのかも分からず入部してくる生徒が少なくない。また、小・中学校時代のスポーツ未経験者が多く入部し、特に近年、生徒の体力向上を第一の課題として練習に取り組ませている。そのため、安全についての指導を徹底した上で、入部当初から生徒個々に月・学期・年ごとの中・長期的目標を定めたミーティングを欠かさず行い、それぞれの生徒に応じた効果的な練習を行っている。それぞれの成長過程で、「生徒自身が感じ、考え、行動する」という自主・自律に結びつく指導を心がけ、体力面やメンタル面の向上をはかっている。日々の練習では、一般公道を走るロード練習や、体づくりトレーニング、奈良県営競輪場でのスピード強化トレーニングなどの基本的な練習以外に、15年以上前から体幹トレーニングや体幹を意識したコンディショニング調整も積極的に取り入れ、選手個々のパフォーマンス向上を図っている。このような取組の結果、インターハイや国民体育大会等での上位入賞、ジュニア世界選手権など国際大会への日本代表生徒の輩出など、全国レベルの高い競技力を維持することができた。また、これまで、何度か日本代表チームの監督やコーチとして、代表チームを指導する機会を与えていただいたことは、指導者としての貴重な経験であった。

また、数年前からは、サイクリング大会やマラソン大会でのボランティア活動、地元中学校での交通安全教室のサポート、交通安全推進運動への参加協力など、自転車競技部ならではの地域交流を進めてきた。特に、昨年度の奈良北高校創立10周年を機に、部員が主体となった交流を積極的に行っている。地元の生駒警察署や生駒市と連携した、小学生への正しい自転車の乗り方の指導、中学生への交通安全の啓発の取組をはじめ、多くの方々との交流経験や発表体験を通じ、部員の行動や発言に責任や自信が現れてきている。生徒たちにとっては、自転車競技の普段の練習だけでは得られない貴重な体験であり、今後も継続していきたい。

高校3年間という限られた期間で、日本代表としての重圧を背負って頑張った生徒やインターハイや国体等の全国大会で上位入賞した生徒のみならず、地道に努力を続けてきた自転車競技部卒業生全員が、部訓「自走不息」に込められた「様々な困難な状況に

も自らの力で打破することや、困っている人の風よけになれる人間になってほしい」という願いのとおり成長し、奈良北高校で活動したことを誇りに思えることを切に願って、日々の指導を行っている。



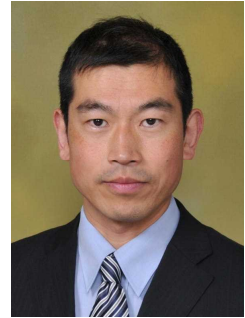
2 成果及び課題

在校生・卒業生だけでなく、保護者の方々にも高校3年間の指導について感謝されることは、指導者、教員という立場だけでなく、一人の人間として責任を果たしたと喜びを感じることができる。高校時代の競技成績だけでなく、大学においても競技を継続したり、また指導者を目指したいと希望する生徒がでてきていることも、これまでの取組の成果である。

今後、生徒自身が全国大会での優勝や入賞を実現させるだけでなく、周りの方々から継続して応援頂けるような雰囲気づくりのためにも、現在取り組んでいる社会貢献活動の継続・発展に力を注ぐことが必要不可欠と感じている。授業を大切にする心構えを軸にした学習への取組と、より発展・充実した練習内容の工夫、そして社会貢献活動への取組によって本校の教育目標である「文武両道」を実践し活動内容の質を一層高めていくことが、今後の課題であると考えている。

1 実践内容

本校に着任以来7年間、生徒会指導部に所属し、生徒会の様々な行事・活動を通して、地域との連携に取り組んできた。平成26年度からは生徒会指導部長、地域連携委員会委員長として、県教育委員会の「地域ぐるみで取り組む小・中・高校生規範意識醸成事業」の代表校担当者となり、様々な教育実践を行っている。これまで取り組んできた地域と連携した活動について報告する。

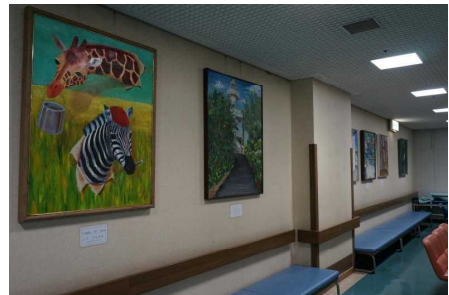


(1) 高田高校地域連携委員会委員長としての地域連携活動の推進

大和高田市の外部団体との連携を新しく開拓し、生徒会だけでなく美術部や音楽部の活動も取り入れることで、地域との様々な連携に取り組んだ。

① 大和高田市社会福祉協議会と連携し、共同募金活動を校内だけでなく、高田市駅前で実施した。また、大和高田市元気フェスティバルに参加し、J R 高田駅前でイベント運営を手伝い、募金活動も実施した。

② 大和高田市立病院と連携し、本校美術部生徒の作品を病院の待合室に展示させていただき、定期的に作品の入れ替えを行っている。また、本校音楽部（コーラス部）も、入院されている患者の方々を対象に、病院内でクリスマスコンサートを実施し、好評を得ている。



③ 大和高田市PTA協議会と連携し、子供夢街道募金活動に協力した。

(2) 「地域ぐるみで取り組む小・中・高校生規範意識醸成事業」代表校担当者としての取組

県教育委員会の上記事業における大和高田市のグループ（高田小学校・高田中学校・高田高校）の代表校担当者として、異なる校種間で目的意識を共有することにより、児童・生徒全体の規範意識を高めていけるよう、三校合同での様々なボランティア活動を企画し、実施した。

① 高田小学校・近鉄高田駅・J R 高田駅周辺の地域清掃を行った。

② 三校の代表生徒が作製した「乗車マナー向上啓発ポスター」を近鉄高田駅・J R 高田駅の改札口前に掲示し、啓発をした。

③ 秋の交通安全運動期間中に、三校で作製した交通安全マスコットをドライバーに配布した。

④ 三校合同で、J R 高田駅前・近鉄高田駅前で、共同募金活動を行った。

⑤ 三校合同で、プランターに花を植え、大和高田市立病院と大和高田市役所に寄贈した。



⑥ 三校合同で、高田小学校前で、挨拶運動を行った。

(3) 生徒会指導部長としての周辺地域での諸活動の推進

生徒会のこれまでの取組をさらに充実・発展させ、周辺地域の学校とも連携した様々な地域連携活動を計画実施した。

① 高田高校周辺の地域清掃を行った。大和高田市立高田商業高校と合同で、天神社の祭りの翌日の清掃を行った。また、高田商業高校、奈良文化高校と合同で、J R 高田駅前、近鉄高田市駅前の地域清掃も行った。

② 高田市駅前で、挨拶運動や募金活動を行った。

③ 文化祭の案内と入場券を本校周辺地域に配布し、近隣地域の方々を案内・招待した。

④ 奈良県立高等養護学校と文化祭への相互出品などを通して継続的に連携交流を深めた。

2 成果及び課題

大和高田市社会福祉協議会や大和高田市立病院、大和高田市 P T A 協議会などの外部団体と連携することができ、活動の幅が広がった。特に、大和高田市立病院での活動では、本校生徒が一般の方と触れ合うことができ、生徒の活動意欲がさらに高まった。また、小中高三校の活動では、三校の児童・生徒が異なる年齢の人と触れ合うことで、自身の成長を実感できたという感想も多く、生徒が達成感を持つことができる機会となった。高田商業高等学校・奈良文化高等学校・高等養護学校との活動では、他の高校生とも交流を持つことができ、生徒の視野を広げることにつながった。

さらに、挨拶運動や募金活動、地域清掃などの活動を通して、多くの生徒が趣旨を理解し、自ら積極的に清掃や美化を心がけるようになった。地域の一員であるという所属意識や生徒全体の規範意識が高まっており、今回の取組の大きな成果といえる。

今後は、さらに活動の機会、種類を増やし、できるだけ多くの生徒に参加させることで、地域に感謝し、自身が成長し、積極的に社会貢献していけるよう、取り組んでいきたい。

3 その他参考となる事項

奈良県立高田高等学校ホームページ www.nps.ed.jp/takada-hs